

一本のわら

楠山正雄

青空文庫

むかし、大和国に貧乏な若者がありました。一人ぼっちで、ふた親も妻も子供もない上に、使ってくれる主人もまだありませんでした。若者はだんだん心細くなつたものですから、これは観音さまにお願いをする外はないと思つて、長谷寺という大きなお寺のお堂におこもりをしました。

「こうしておりましたは、このままあなたのお前でかつえ死にに死んでしまいかも知れせん。あなたのお力でどうにかなるものでしたら、どうぞ夢でもお教え下さいまし。その夢を見ないうちは、死ぬまでここにこうしておこもりをしておりますから。」

こういつて、その男は観音さまの前につつ伏しました。それなり幾日たつても動くとはしませんでした。

するとお寺の坊さんがそれを見て、

「あの若者は毎日つつ伏したきり、物も食はずにいる様子だが、あのまま置いてかつえ死にに死なれでもしたら、お寺の汚れになる。」

とぶつぶつ口小言をいいながら、そばへ寄つて来て、

「お前はだれに使われている者だ。いったいどこで物を食べるのか。」

と聞きました。若者はとろんとした目を少しあけて、

「どうしまして、わたしのような運の悪い者は使つてくれる人もありません。ごらんのとおり、もう幾日も何も食べません。せめて観音さまにおすがり申して、生きることも死ぬとも、この体をどうにでもして頂こうと思つたのです。」

といました。坊さんたちはそこで相談して、

「困つたものだ。うつちやつておくわけにもいかない。仮にも観音さまにお願い申しているというのだから、せめて食べ物だけはやることにしよう。」

といつて、みんなで代わる代わる、食べ物を持つて行つてやりました。若者はそれをもらつて食べながら、とうとう三七二十一日の間、同じ所につつ伏したまま、一生懸命お祈りをしていました。

いよいよ二十一日のおこもりをすませた明け方に、若者はとうとうとしながら、夢を見ました。それは観音さまのまつられているお帳の中から、一人のおじいさんが出てきて、「お前がこの世で運の悪いのは、みんな前の世で悪いことをしたむくいなのだ。それを思

わないで、観音さまにぐちをいうのは間違っている。けれども観音さまはかわいそうにおぼしめして、少しのことならしてやろうとおっしゃるのだ。それでとにかく早くここを出ていくがいい。ここを出たら、いちばん先に手にさわったものを拾って、それはどんなつまらないものでもだいいじに持っているのだ。そうすると今に運が開けてくる。さあそれでは早く出ていくがいい。」

と追い立てるようにいわれたと思うと、ふと目を覚ましました。

若者はのそのそ起き上がって、いつものとおり坊さんの所へ行つて、食べ物をもらつて食べると、すぐにお寺を出ていきました。

するとお寺の大門をまたぐひょうしに、若者はひよいとけつまずいて、前へのめりました。そしてころんだはずみに、見ると、路の上に落ちていた一本のわらを、思わず手につかんでいました。

若者は、

「何だわらか。」

といって、つい捨てようとしたが、さつきの夢に、「手にさわったものは何でもだいいじに持つておれ。」といわれたことを思い出して、これも観音さまのおさずけものか

も知れないと思つて、手の中でおもちやにしながら持つていきました。

二

しばらく行くと、どこからかあぶが一匹飛んできて、ぶんぶんうるさく顔のまわりを飛び回りました。若者はそばにある木の枝を折つて、はらいのけはらいのけして歩いていきましたが、あぶはやはりどこまでもぶんぶん、ぶんぶん、うるさくつきまとつてきました。若者はがまんができなくなつて、とうとうあぶをつかまえて、さっきのわらでおなかをしぼつて、木の枝の先へくくりつけて持つていきました。あぶはもう逃げる事ができなくなつて、羽ばかりあいかわらずぶんぶんやつていました。

すると向こうから、身分のあるらしい様子をした女の人が、牛車に乗つて長谷寺へおまいりにやつて来ました。

その車には小さな男の子が乗っていました。男の子は車のみすを肩にかついで、たいくつそうにきよるきよる外のけしきをながめていました。すると若者が木の枝の先にぶんぶんいうものをつけて持つて来るのを見て、ほしくなりました。そこで男の子は、

「あれをおくれよ。あれをおくれよ。」

と、馬うまに乗のつてお供ともについている侍さむらいにいいました。

侍さむらいは若者わかものに向むかつて、

「若さまがそのぶんぶんいうものをほしいとおっしゃるから、氣きの毒どくだがさし上あげてくれないか。」

と頼たのみました。若者わかものは、

「これはせつかく仏ほとけさまからいただいたものですが、そんなにほしいとおっしゃるなら、お上あげ申もうしましょう。」

といつて、すなおにあぶのついた枝えだを渡わたしました。車くるまの中の女をんなの人はそれを見みて、

「まあ、それはお氣きの毒どくですね。ではその代かわりに、これを上あげましょう。のどがかわいたでしょう、お上あがりといつて、上あげておくれ。」

といつて、大きな、いいにおいのするみかんを三つ、りっぱな紙かみにのせて、お供ともの侍さむらいに渡わたしました。

若者わかものはそれをもらつて、

「おやおや、一本ほんのわらが大きなみかん三つになった。」

とよろこびながら、それを木の枝にむすびつけて、肩にかついでいきました。

三

するとまた向こうから一つ、女車が来ました。こんどは前のよりもいっそう身分の高い人が、おしのびでおまいりに来たものとみえて、大ぜいの侍や、召使の女などがお供についていました。するとそのお供の女の一人が、すっかり歩きくたびれて、

「もう一足も歩けません。ああ、のどがかわく。水が飲みたい。」

といいながら、真つ青な顔をして往來に倒れかかりました。侍たちはびびくりして、どこかに水はないかとあわてて探し回りましたが、そこらには井戸もなし、流れもありませんでした。そこへ若者がそのそ通りかかりますと、みんなは、

「もし、もし、お前さん、この近所に水の出る所を知りませんか。」

とたずねました。若者は、

「そうですね。まあこの辺、五町のうちには清水のわいている所はないでしょうが、いったいどうなさったのです。」

と聞きました。

「ほら、あのとおりに歩きくたびれて、暑さに当たって、水をほしがって死にそうになっている人があるのです。」

「おやおや、それはお気の毒ですね。ではさしあたりこれでも召し上がってはいかががでしょうか。」

若者はそういつて、みかんを三つとも出してやりました。みんなは大そうよろこんで、さつそくみかんをむいて、病人の女にその汁を吸わせました。すると女はやつと元気がついて、

「まあ、わたしはどうしたというのでしょうか。」

といいながら、そこらを見回しました。みんなは水がなくなつて困っていたところへ、往來の男がみかんをくれたので助かったことを話しますと、女はよろこんで、

「もしこの人がいなくなつたら、わたしはこの野原の上で死んでしまうところでしたね。」

といつて、真っ白な上等な布を三反出して、

「どんなお礼でもして上げたいところだけれど、途中でどうすることもできないから、ほんのおしるしにさし上げます。」

と行って、渡しました。

若者はそれをもらって、

「おやおや、みかん三つが布三反になった。」

と、ほくほくしながら布を小わきにかかえて、また歩いて行きました。

四

その明くる日、若者はまた昨日のようにあてもなく歩いて行きました。するとお昼近くなつて、向こうから大そうりつばない馬に乗った人が、二、三人のお供を連れて、とくいらしくほかほかやって来ました。若者はその馬を見ると、

「やあ、いい馬だなあ、ああいうのが千両馬というのだろう。」

と、思わず独り言をいいながら、馬をながめていました。すると馬は若者の前まできて、ふいにぼつたり倒れて、そのままそこで死んでしまいました。乗っている主人も子供の家来たちも、真っ青になりました。馬のくらははずして、水を飲ましたり、なでさすったり、いろいろにいたわっていました。馬はどうしても生き返りませんでした。乗り

手はがっかりして、泣き出しそうな顔をしながら、近所の百姓馬を借りて、それに乗ってしおしおと帰っていききました。その後から、家来たちが、馬のくらやくつわをはずして、ついていきました。けれどいくらい馬でも、死んだ馬をかついでいくことはできないので、それには下男を一人後に残して、死んだ馬の始末をさせることになりました。さつきからこの様子を見ていた若者は、「昨日は一本のわらがみかん三つになり、三つのみかんが布三反になった。こんどは三反の布が馬一匹になるかも知れない。」と思いなから、下男のそばに近づいて、

「もし、もし、その馬はどうしたのです。大そうりつばな、いい馬ではありませんか。」
 といいました。下男は、

「ええ、これは大金を出して、はるばる陸奥国から取り寄せた馬で、これまでもいろんな人がほしがって、いくらでも金は出すから、ゆずってくれないかと、ずいぶんうるさく申し込んできたものですが、殿さまが惜しがって、手放さうともなさらなかったのです。それがひよんなことで死んでしまつて、元も子もありません。まあ、皮でもはいで、わたしがもらつて、売ろうかと思うのですが、旅の途中ではそれでもできないし、そうかといつてこのまま往來に捨てておくこともできないので、どうしたものか、困つてい

ろです。」

といいました。若者は、

「それはお気の毒ですね。では馬はわたしが引き受けて、何とか始末して上げますから、わたしにゆずつて下さいませんか。その代わりにこれを上げましょう。」

と云つて、白い布を一反出しました。下男は死んだ馬が布一反になれば、とんだもうけものだと思つて、さつそく馬と取りかえつこをしました。その上、「もしか若者の気がかわつて、馬の死骸なんぞと取りかえては損だと考へて、布を取り返しにでも来ると大へんだ。」と思つて、後をも見返らずに、さつさと駆けて行つてしまいました。

五

若者は、下男げなんの姿すがたが遠とおくに見えなくなるまで見送りました。それからその清水しみずで手を洗あらいきよめて、長谷寺はせでらの観音かんのんさまの方ほうに向むいて手を合あわせながら、

「どうぞこの馬うまをもとのとおりに生いかして下さいまし。」

と、目めをつぶつて一生懸命いっしょうけんめいにお祈いのりをしました。

そうすると死んでいた馬がふと目をあいて、やがてむくむく起き上がろうとしました。若者は大そうよろこんで、さつそく馬の体に手をかけて起こしてやりました。それから水を飲ませたり、食べ物をやったりするうちに、すっかり元気がついて、しやんしやん歩き出しました。

若者は、近所で布一反の代わりに、手綱とくつわを買って馬につけますと、さつそくそれに乗って、またずんずん歩いて行きました。

その晩は宇治の近くで日が暮れました。若者はゆうべのようにまた布一反を出して、一軒の家に泊めてもらいました。

その明くる朝早くから、若者はまた馬に乗って、ぽかぽか出かけました。もう間もなく京都の町に近い鳥羽という所まで来かかりますと、一軒の家で、どこかうち中よそへ旅にでも立つ様子で、がやがやさわいでおりました。若者はふと考えました。

「この馬をうかうか京都まで引張って行って、もし知っている者にでも逢つて、盗んで来たなぞと疑われでもしたら、とんだ迷惑な目にあわなければならぬ。ちようどのうちの人たちはよそへ行くところらしいから、きっと馬が入り用だろう。ここらで売って行く方が安心だ。」

こう思つて、若者は、

「もしもし、安くしておきますから、この馬を買つて下さいませんか。」

といいました。するとそのうちの人たちは、なるほどそれは有り難いが、安く売るといつてもさしあたりお金がない。その代わり田とお米を分けて上げるから、それと取りかえつこなら、馬をもらつてもいいといいました。若者は、

「わたしは旅の者ですから、田やお米をもらつても困りますが、せつかくおつしやることですから、取りかえつこをしましょう。」

とふしようぶしようにいいました。

「そうですか。では馬をはいけんしよう。どれどれ。」

と向こうの男はいいながら、馬に乗つてみて、

「どうもこれはすばらしい馬だ。取りかえつこをしてもけつして惜しくはない。」

といつて、近くにゐる稲田を三町と、お米を少しくれました。そして、

「ついでにこの家もお前さんにあづけるから、遠慮なく住まつて下さい。わたしたちは当分遠方へ行つて暮らさなければなりません。まあ、寿命があつて、また歸つて来ることがあつたら、そのとき返してもらえばいい。また向こうで亡くなつてしまつたら、

そのまま、この家をお前さんのものにして下さい。べつに子供もないことだから、後でぐずぐずいうものはだれもないのです。」

といつて、家まであずけて立つて行きました。

若者はとんだ拾い物をしたと思つて、いわれるままにその家に住みました。たつた一人の暮らしですから、当分はもらつたお米で、不自由なく暮らしていききました。

そのうちに人を使つて田を作らせて、三町の田の半分を自分の食料に、あとの半分を人に貸して、だんだんこの土地に落ち着くようになりました。

秋になつて刈り入れをするころになると、人に貸した方の田はあたり前の出来でしたが、自分の分につくった方の田は大そうよくのりました。それからというものは、風でちりを吹きためるように、どんどんお金がたまつて、とうとう大金持ちになりました。家をあずけて行つた人も、そのまま幾年たつても帰つて来ませんでしたから、家もとうとう自分のものになりました。

そのうちに、若者はいいお嫁さんをもらつて、子供や孫がたくさん出来ました。そしてにぎやかなおもしろい一生をおくるようになりました。

一本のわらが、とうとう、これだけの福運をかき寄せてくれたのです。

青空文庫情報

底本：「日本の古典童話」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2006年7月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一本のわら

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>